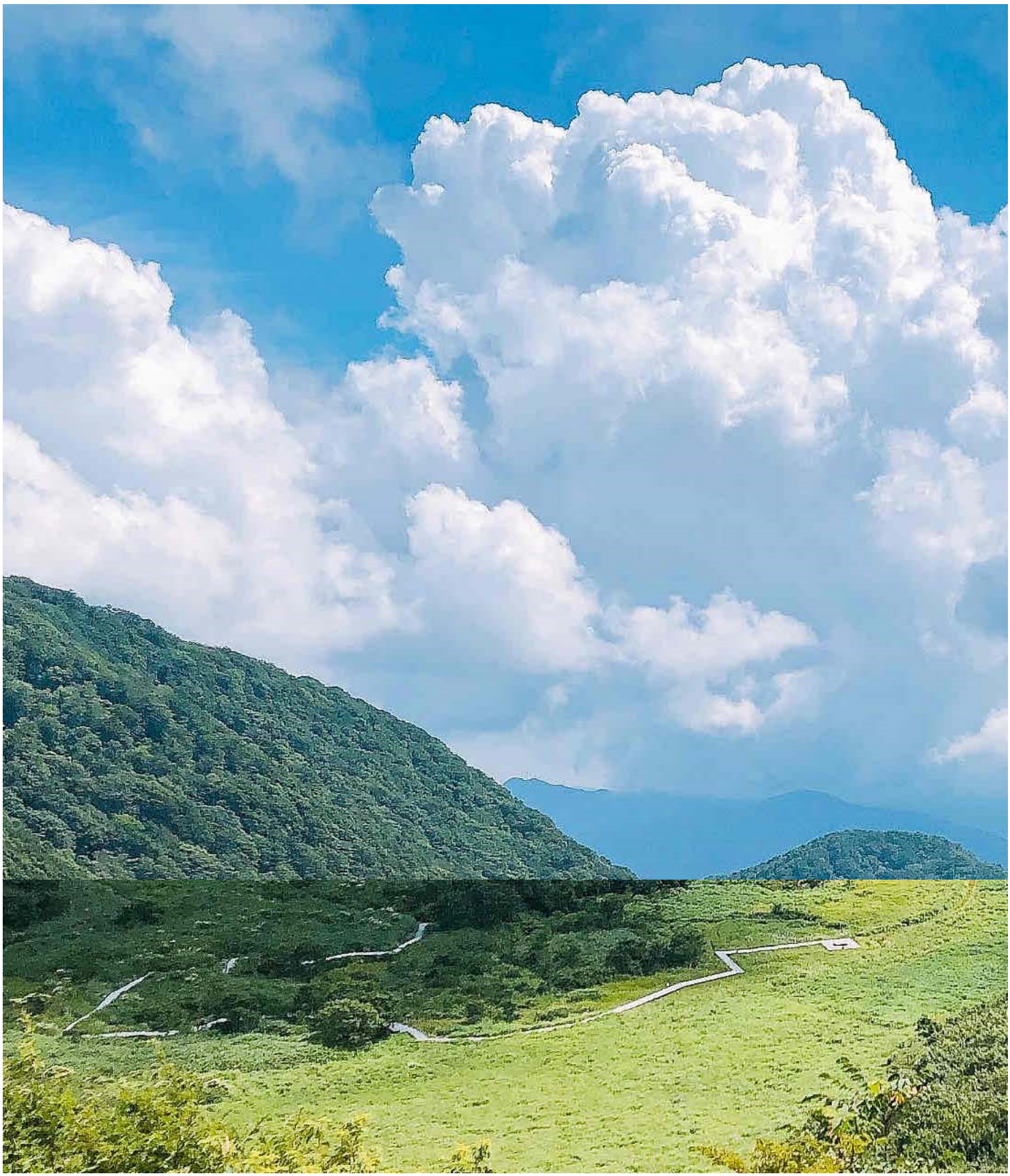
草原がつなぐ人・自然・文化

# 全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol.55（Jul. 2023）



象山から見た鏡ヶ成（鳥取県日野郡江府町／鏡ヶ成保全再生活用協議会提供）

# 各地からの報告

## 鏡ヶ成での取組

（井上雄人：大山隠岐国立公園管理事務所・鏡ヶ成保全再生活用協議会事務局）

大山隠岐国立公園内にある鏡ヶ成は中国地方最高峰「大山」の南東に位置し、三方を烏ヶ山、象山及び擬宝珠山に囲まれた盆地状の高原です。山地湿原の少ない鳥取県では貴重な標高約 900mの湿原と、ススキを主体とした草原が広がっています。湿原ではノハナショウブやコオニユリ、バイケイソウが見られ、湿原中央の池では毎年モリアオガエルの産卵が見られます。草原ではノアザミ、ヨツバヒヨドリ、オカトラノオが特に多く、ササユリやナルコユリ、オミナエシも見られます。ウラギンヒョウモン等のヒョウモンチョウ類やヒメシジミも多くみられ、初夏にはアサギマダラが飛来します。

明治時代以前には利用はほとんどありませんでしたが、1898 年に陸軍の軍馬育成場が造られてからは放牧地や採草地として利用されるようになり、戦後しばらくはこのような利用形態が続いていたと考えられています。その後、1956 年に大山隠岐国立公園の集団施設地区に指定され、1963 年に開業した国民休暇村（現在の休暇村奥大山）をはじめ、キャンプ場、スキー場等が整備された利用拠点となっています。

○鏡ヶ成での取組の経緯

鏡ヶ成の自然環境について、環境庁（現在の環境省）で初めて正式に調査を実施したのは 1989 年のことです。当時休暇村スキーリフトの整備に伴い鏡ヶ成の保全への関心が高まっており、環境庁が鳥取大学等の専門家に依頼して、植生調査を実施しました。調査の結果、当時すでに湿原で乾燥化が進行している状況でした。

1994 年、植生保全のため、環境庁が湿原への木道設置を計画しました。これに伴い、木道設置の計画を検討する目的で、環境庁や関係団体からなる「奥大山を語る会」が設立されました。同会での検討結果を踏まえて、1996 年には鳥取県の事業にて裸地部分へのノハナショウブの株分けや灌木の影になり弱っている湿性植物の移植等を実施しています。

2000 年から 2002 年までの 3 ヶ年で、環境省にて「鏡ヶ成保全管理方針検討調査」を実施しました。この事業では、湿原においては土嚢を使った堰を設置し湿原植生の回復効果を検証し、草原においては試験区を設けて刈払いの時期や刈った草の取扱（搬出、刈り捨て）、火入れの有無を比較して管理手法を検討しました。この調査では、湿原においては湿潤環境が形成される過程でありモニタリングの継続が必要であるという結果となり、草原においては 7 月に高刈り（刈り捨て）を実施する管理手法が、効果と労力の両面から考えて最も妥当であるという結論となりました。

2003 年からは 5 ヶ年で環境省にてグリーンワーカー事業「鏡ヶ成草原の景観保全管理作業調査」を実施しました。2002 年までの事業で設置された土嚢堰については継続してモニタリングを実施し、草原試験区については 7 月に高刈りを実施しました。草原試験区では、3 年目にはスミレ類、ノアザミが増加し、草刈りの効果が確認されました。しかし土嚢堰を設置した湿原については、思うように湿原植生が回復しませんでした。

山焼きの様子

象山から見た鏡ヶ成

ヒメシジミ

2007年までの事業終了後も、環境省事業として自然再生活動が継続して実施されていました。2015年には、鳥取大学日置教授（当時役職、以下同様。）を招き、植生や水質、地下水位、日射量とこれらの相互関係について改めて詳細な調査を実施しました。この結果、湿原植生が保たれているのは中央のごく一部のみで、それ以外の場所では地下水位の低下やササや灌木の侵入による光環境の悪化により湿原とは言えない状態となっていることが明らかになりました。

これを受けて、2016年からは環境省と鳥取大学と協働での自然再生事業が始まりました。この事業では、春秋2回の草刈りや堰の設置、小規模な切土・盛土による地下水位の上昇を図りました。その結果、ノハナショウブやトキソウ等が生育する湿性植物群落が拡大しました。

2018年には試験的に山焼きを実施しました。山焼きをしない区域、山焼きのみの区域、山焼きと選択的草刈り（ススキ、低木類を刈り取る）の併用区域の3つの区域を設け、比較を行ったものです。山焼きと選択的草刈りの併用区域で最も草原性植物の増加が顕著であるという結果になりました。

○協議会発足の経緯

山焼きと選択的草刈りの併用が効果的であるとの結果から山焼き実施の機運が高まり、人手を要する山焼き作業を本格化するため、体制の組織化が求められるようになりました。そして2019年3月には、鏡ヶ成に水源を持つ「サントリー天然水奥大山ブナの森工場」を所有するサントリーホールディングス（株）、地元自治体である江府町、鏡ヶ成集団施設地区を管理する環境省の3者間で鏡ヶ成の保全、再生および活用に関して協働を進めることを目的とした協定が締結されました。このような自然環境の保全等を協働で進めることを目的とした協定は、当時全国の国立公園で初めての事例でした。

そして協定締結と同日に、産（サントリーホールディングス（株）、サントリープロダクツ（株）、（一財）休暇村協会、（一財）自然公園財団）、学（鳥取大学、鳥取県立大山自然歴史館）、官（環境省、鳥取県、江府町）で構成される鏡ヶ成保全再生活用協議会が発足しました。現在ではこの協議会が鏡ヶ成の活動の中心となり、春の山焼きや初夏の選択的草刈り、秋の防火帯作り等をボランティアの協力も得ながら実施しています。また協議会を年 2 回開催し、活動の方針・内容の検討や各構成員による活動の共有を行っています。

○協議会の現在とこれから

現在、構成員の退職等を踏まえた体制の維持拡充が課題のひとつとなっています。昨年度は年2回の協議会に加えてワークショップを実施し、目指すべき鏡ヶ成の姿や課題、それに対する取組内容について構成員で話し合い、鏡ヶ成の将来ビジョンをとりまとめる作業を行いました。今年度の協議会では、昨年度の結果を踏まえてビジョンを具体化し、公表できる形に整理し、より多くの方に鏡ヶ成の活動に関心をもっていただきたいと考えています。

また「令和5年度「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰」にて、当協議会の会長である鳥取大学日置教授が、鏡ヶ成をはじめ全国各地での自然再生に関わる各種活動が評価され、環境大臣賞を受賞しました。日置会長からも「これは協議会皆で取った賞である」とのコメントもいただき、これまで取り組んできた協議会構成員にとっても活動の励みとなる受賞となりました。

今後も、将来ビジョンのもとに活動を継続し、多様な動植物が生息・生育する魅力的な鏡ヶ成を保全・再生するとともに、環境教育や観光への活用を図っていきたいと考えています。

6 月に実施した授与式の様子

協議会構成員の皆さん

## 書籍などの紹介

**「愛しの生態系」**

植生学会 編　前迫ゆり 責任編集

文一総合出版 定価 3,000 円（税別）

出版社の書籍ページ：

https://www.bun-ichi.co.jp/news/tabid/tabid/57/pdid/978-4-8299-7109-3/Default.aspx

植生学会に関わる研究者たちが日本各地の自分の自慢のフィールドについてわかりやすく紹介した『愛しの生態系 研究者とまもる「陸の豊かさ」』が出版されました。全国 30 ヵ所のフィールドの研究成果が、それぞれ 6 ページ程度にまとめられており、きれいな写真と一緒に楽しく読める内容にないっています。日本各地の研究成果が「世界遺産の生態系」「火山の国の植物たち」「海と植物」「寒さと植物」「樹木のない自然」「シカの脅威を考える」「人のくらしとともに」の 7 つの章に分けられて紹介されていますが、宮崎県の都井岬の放牧地、北海道の小清水原生花園、熊本県の阿蘇の草原、兵庫県の但馬・淡路島の畦畔、静岡県の茶草場、長野県の牧の入茅場と草原生態系の話もたくさん出てきます。横川は阿蘇グリーンストックの増井太樹さんと一緒に阿蘇の草原のことを書きました。

非常に大事だなと思う点は、この本は草原に限らず各地の生態系のことが幅広く紹介されている点です。普段は草原で活動されている方々が、草原も含めた各地のいろんな生態系やその保全にまつわる事

例をまとめて参照することで、各自の活動の中での考え方などに幅が出るのではないかと思います。

後半には日本の植生について概説された章や用語解説もあります。草原の管理や再生には植生学的な考え方は重要になりますが、こういった教科書的な記述も草原のことを考える基礎になると思います。

ぜひ手に取って読んでいただければ幸いです。

＜横川昌史：京都府在住＞